

## ➤ ジャパン (JAPAN) = アイルランド

牡5歳・鹿毛 (イギリス産・2016年2月22日生まれ)

父: Galileo = 母: Shastye (母の父: Danehill)

馬主 : 松島正昭氏、ジョン・マグニア夫人、マイケル・テイバー氏、デリック・スミス氏

調教師 : エイダン・オブライエン

騎手 : 武豊

戦績 : 全21戦7勝、2着1回、3着4回

総獲得賞金 : 約2億8,240万円

主な戦績 : '19 英インターナショナルステークス (英 G1) 1着  
'19 パリ大賞 (仏 G1) 1着  
'19 キングエドワード VII 世ステークス (英 G2) 1着  
'18 ベレスフォードステークス (愛 G2) 1着  
'21 メルドステークス (愛 G3) 1着  
'21 オーモンドステークス (愛 G3) 1着  
'21 ソードダンサーステークス (米 G1) 2着  
'21 コロネーションカップ (英 G1) 3着  
'20 エクリプスステークス (英 G1) 3着  
'19 英ダービー (英 G1) 3着

ジャパンはイギリスで生産され、アイルランドで調教される鹿毛の5歳牡馬です。ニューセルズ・パーク・スタッドの生産馬として、1歳時10月のタタソールズ・イヤリング・セールに上場されて130万ギニー(約2億275万円)という高額でクールモアグループに落札され、デリック・スミス氏、ジョン・マグニア夫人、マイケル・テイバー氏の三者による共同所有馬としてアイルランドのエイダン・オブライエン厩舎に入厩しました。馬名のジャパンは「日本」や「漆」のようですが、“ジャパン”と名付けられたサラブレッドは、アメリカのジョッキー・クラブ・インフォメーション・システム社のサービスで検索しただけでも15頭、2000年以降では9頭を数えますが、本馬を含めて血統から「日本」を連想させる馬は少なく、わずかに父メダリアドロ(金メダル)から連想されたと思われる2012年アメリカ産牡馬のジャパンが目につく程度です。クールモアは“オーストラリア”、“ヨハネスブルグ”など国名や都市名をダイレクトに馬名することが少なくなく、本馬もその命名法による一頭です。

ジャパンの血統は父ガリレオ(その父サドラーズウェルズ)、母シャスタイ、その父デインヒル。父のガリレオは2、3歳時に8戦6勝、2着1回、3歳時に英ダービー、愛ダービー、キングジョージ VI 世&クイーンエリザベスステークスを優勝し、愛チャンピオンステークスで2着に入りました。2002年にアイルランドのクールモア・スタッドで種牡馬入り。芝の1400mから2,050mのG1を10勝した近年のヨーロッパ最強馬フランケル、英、愛2000ギニー馬のグレンイーグルス、凱旋門賞馬のファウンド、ヴァルトガイスト、英ダービー馬のニューアプローチ、ルーラーオブザワールド、オーストラリア、アンソニーヴァンダイク、サーペンタインなど数多くの産駒がG1勝馬となり、昨年まで12回も英愛チャンピオンサイアーに輝いた大種牡馬です。

ジャパンの母のシャスタイは現役時にイギリスで芝2,420mと芝2,600mのレースに優勝、芝2,400mのリステッド競走で2着の実績があります。母としては、ジャパンの全弟となるモーグルがパリ大賞と香港ヴァーズを優勝、全姉のシークレットジェスチャーは英独オークスでともに2着、さらに全兄サーアイザックニュートンもアイルランドでG3を制するなど重賞勝馬を多数輩出。祖母サガネカの産駒(母シャスタイの兄弟)には凱旋門賞馬サガミクス、クリテリウムドサンクルー優勝馬で、武豊騎手が乗って2001年の凱旋門賞で3着のサガシティなどがいます。

ジャパンのデビューは2歳9月の未勝利戦(カラ、芝1,600m)でここは7着に終わりましたが、2戦目となった不良馬場の未勝利戦(リストウェル、芝1,400m)で中団から3/4馬身差し切って初勝利を挙げました。次いでネースのベレスフォードステークス(愛G2、芝1,600m)に出走し、7頭立ての3番手から短アタマ差抜け出して重賞初制覇を飾りました。この時の鞍上はシーミー・ヘファナン騎手です。

3歳となったジャパンはこの年6戦。英ダービーの前哨戦となるダンテステークス(ヨーク、英G2、芝2,050m)は4着でしたが、英ダービー(エプソム、英G1、芝2,410m)は後方からアンソニーヴァンダイクに半馬身差まで迫る3着に好走し、同厩舎

のブルーム(4着)には短アタマ差先着しました。それから中2週で臨んだキングエドワード VII 世ステークス(アスコット、英 G2、芝 2,390m)はほぼ最後方から直線では外を一気に突き抜けて優勝、2着に4馬身半差をつけて非凡な能力をアピールしました。

上昇気流に乗ったジャパンは、7月のパリ大賞(パリロンシャン、仏 G1、芝 2,400m)も3番手からの競馬でライバルを抑えて連勝。初のG1勝ちを飾ると8月の英インターナショナルステークス(ヨーク、英 G1、芝 2,050m)も、プリンスオブウェールズステークス優勝馬でキングジョージ VI 世&クイーンエリザベスステークス2着のクリスタルオーシャンとの一騎討ちをアタマ差制して優勝。堂々の3連勝でヨーロッパの一線級に躍り出ました。3連勝はすべてライアン・ムーア騎手によるものです。パリに乗り込んで迎えた10月の凱旋門賞は、折からの道悪でヴァルトガイストから4馬身差の4着に終わりましたが、マジカル(5着)やガイヤース(10着)、それに日本から参戦したキセキ(7着)、ブラストワンピース(11着)、フィエールマン(12着)に先着しました。

その後“キーフアーズ”の松島 正昭氏に一部所有権が売却されて、四者による共有となったジャパンは、この年G1を5戦します。6月のプリンスオブウェールズステークス(アスコット、英 G1、芝 1,990m)はロードノースの4着、7月のエクリプスステークス(サンダウン、同)はガイヤースの3着、続くアスコットのキングジョージ VI 世&クイーンエリザベスステークス(英 G1、芝 2,390m)は3頭立てでエネイブルから大きく離された3着で入線。この大敗はレース後に判明した挫趾によるものでした。

秋になっても調子は戻らず9月の愛チャンピオンステークス(レパーズタウン、愛 G1、芝 2,000m)はマジカルの5着。その後、武豊騎手を迎えて凱旋門賞に出走する予定でしたが、オブライエン厩舎で使用していた飼料に禁止薬物が混じった可能性があったため、出走が取り消されました。10月の英チャンピオンステークス(アスコット、英 G1、芝 1,990m)は馬場の悪化も重なって、勝ったアデイブに2秒以上離された9着に敗れ、4歳時は勝星なしに終わります。ガリレオの産駒にありがちな長いスランプだったようです。

4シーズン目となった今年(2021年)は5月のオーモンドステークス(チェスター、英 G3、芝 2,680m)から始動し、2、3番手から抜け出して、後に長距離G1を制するトゥルーシャンを3/4馬身抑えて優勝。約1年9ヶ月ぶりの勝鞍を挙げて、長いトンネルから抜け出しました。6月のコロネーションカップ(エプソム、英 G1、芝 2,410m)はパイルドライヴァーの3着、中1週で臨んだロイヤルアスコット開催のハードウィックステークス(アスコット、英 G2、芝 2,390m)はワンダフルトゥナイトの6着に終わりましたが、7月のメルドステークス(レパーズタウン、愛 G3、芝 1,800m)は63.5キロを背負いながら、ここも3番手から単勝2.875倍の1番人気に応じて優勝。3歳以降の5勝はすべてライアン・ムーア騎手によるものです。

この後、オブライエン調教師は、ジャパンの新たな可能性を求めてアメリカの芝競馬に活躍の場を求めます。その初戦となった8月のソードダンサーズステークス(サラトガ、米 G1、芝 2,400m)は前が塞がる間遠がありながらも、体勢を立て直して勝ったグーフォにクビ差まで迫る2着に善戦。10月のジョーハーシューターフクラシック(ベルモントパーク、米 G1、芝 2,400m)でも直線入り口で前が開かずロックエンペラーの6着と不完全燃焼でしたが、小回りのデルマー競馬場を舞台としたブリーダーズカップターフ(米 G1、芝 2,400m)では5番手追走から直線で見せ場をつくって勝ったユビアーから3馬身半差の4着で入線。僚馬ブルーム(2着)には先着を許しましたが、G1ウイナーの底力を垣間見せました。

通算成績は21戦7勝、2着1回、3着4回で、これまでに挙げた勝鞍の内訳は1,800m以下で3勝、2,050m戦で1勝、2,400m(2,390mを含む)で2勝、2,680m戦で1勝と幅広い距離適性を示しています。左回りは12戦5勝、2着1回、3着2回、重馬場と不良馬場の成績は4戦1勝。芝 2,400mのベストタイムは、ブリーダーズカップターフと、ジョーハーシューターフクラシックの2分26秒5(ともに良馬場)です。



2021年メルドステークス

## ➤ ジャパン (JAPAN)

- **馬主：松島正昭氏、ジョン・マグニア夫人、マイケル・テイバー氏、デリック・スミス氏**  
(Masaaki Matsushima, Mrs. John Magnier, Michael Tabor, Derrick Smith)

ブルームの項をご参照ください。

- **調教師：エイダン・オブライエン (Aidan O'Brien)**

ブルームの項をご参照ください。

- **騎手：武豊**

本会所属騎手のため省略します。